

映像取材からみた テレビ報道の発達

寺田捨己(TBS)



ベトナム戦争取材 中部戦線の米軍基地で 取材中の筆者
手にはBell&Howell 70DR(1969年)

みん
な
の
こ
ろ
う
民
放
史

題字 中川 順

■初期のテレビ報道

私がTBSに入社したのは1963年。日本でテレビ放送が始まって10年ほど経った頃だ。

VTRはあることはあったが、録画再生機・カメラともにトラックで運ぶような大型で、手持ち撮影など不可能だったからニュース取材は16mmの白黒シネフィルムを使用していた。主力カメラはアメリカ・ベルハウエル社のフィルムで、重量は3kgと軽かったが、装填できるフィルムは100フィート・2分40秒分しかないので編集を考えながら撮影した。

フィルムは本社に持ち帰って現像しないと放送できない。現場からの運搬時間、現像時間、編集に要する時間を逆算して締切時間が決められた。

まだ全日放送ではなく、午後の数時間は電波を停止していたから、都内では新聞の夕刊のほうが夕方のテレビニュースより早く、速報に関しては新聞よりも遅かった。

昼のニュースにはフィルムでは間に合わないが、放送したい場合はポラロイド写真を電話回線で電送しテロップで放送するという、新聞の写真部と同じような取材も

した。

現場が遠隔地の場合、撮影したフィルムをヘリで運搬して本社の屋上に投下するのが最も早い方法だが、費用がかかるので大事件の場合に限られ、通常は車で持ち帰るかバイクに託し、遠隔地では列車便を利用した。

1963年、製品の代わりに石炭ガラを詰めて輸出した詐欺事件があり、逃亡した主犯がシンガポールで逮捕され貨物船で横浜港に護送されたことがあったが、沖合で警察の船に乘せる時に撮影するチャンスがあり、各社がタグボートをチャーターして貨物船に乗り込んだ。新人だった私は先輩カメラマンが撮影したフィルムを預かって、横浜駅から国電・地下鉄を乗り継ぎ赤坂の本社現像所に駆け込んだことを覚えている。この時、新聞社のカメラマンは原稿を運ぶのに貨物船上から伝書鳩を飛ばした。新聞報道で伝書鳩を使用した最後の頃ではなかるうか。

フィルム・カメラは撮影レンズとファインダーが別々のレンズだから、被写体との距離によって角度を調節し両レンズの視野を一致させなければならなかった。近接

撮影のあと距離合わせを忘れて望遠撮影をすると撮影レンズはフアインダーと異なる目標を捉えてしまう。

特別国会の開会式で天皇陛下のお言葉を新人が撮影した時、背景のカーテンばかりが映っており、陛下のお姿が見えなかったと言う話が残っている。

1970年代、キャノンがモーター動力の国産カメラを開発して主力カメラになったが、フィルムは動力がゼンマイ式だから電源の心配がなく、ENGが導入されるまで長い間愛用された。

1972年の浅間山荘事件では、生中継が数日間続けられたが、我々が撮影したフィルムは本社まで運ばない限り放送されず、生中継に対して無力感を味わった。フィルムは、夕方以後のニュースでやっと使用される連日だった。

しかし、まだVTRテープが高価で、何回も使い廻したため、当時の生中継の映像は殆ど残っていない。資料として残っているのはフィルム映像で、自分が撮影したカットが放送されると懐かしと思う。

■ケネディ暗殺

1963年の11月、新人だった私は先輩記者と泊まり勤務にしていた。

23日未明に共同通信からのファクシミリがチンチンと緊急ニュースの警報音を発した。

「遊説中のケネディ大統領がテキサス州ダラスで何者かに撃たれた」との第一報だった。



日米衛星中継に飛び込んできた衝撃の映像
ケネディ大統領暗殺

この日の朝、政府レベルで日米間の初の宇宙中継実験が計画されており、その特別番組組班も泊まっていた。茨城県十王町のKDDの大パラボラアンテナで太平洋上の衛星の電波を捕捉するのだが、静止衛星ではないので当時としてはきわめて困難な技術だった。予定時間に見事に電波はとらえられた

のだが、記念すべき放送がケネディ大統領の暗殺を告げた。2日後の中継では国葬と犯人とされたオズワルドが連行の途中で射殺される衝撃的シーンが放送された。テレビ報道が新聞を超えた衛星中継の始まりだった。

■ベトナム戦争と湾岸戦争

1963年のトンキン湾事件から米軍がベトナム戦争に介入し、当初の予想に反して長期化・泥沼化して行った。1968年春のテト攻勢の際、サイゴン(現在のホーチミン市)のアメリカ大使館が一時占拠され、サイゴン陥落近しを思わせた。

アメリカCBSのニュース取材



ベトナム戦争南部デルタの
南ベトナム政府軍(1969年)

に依存していたTBSでも、自前の取材をしようと、サイゴン支局を設けて初代のカメラマンとして赴任した。カメラマンになって4年ほどの若造だったが、単身赴任だったから、カメラの腕はともかくノイローゼになりそうもない奴ということで指名されたのだった。NHK、NTV、FNN系列は既に支局が開設されていた。

テレビニュースのカラー化が始まった頃で、コダックのフィルムを持ち込み、支局の冷蔵庫に大切に保管して使用した。撮影したフィルムは週に2〜3便あるPANAMやAIRFRANCEで航空貨物として羽田まで送った。従って現地では自分が撮影したフィルムの仕上がりを確認することはできなかった。

1969年の夏、アポロ11号が月面に着陸した歴史的な中継画面は、サイゴンの目抜き通りの電器屋の店頭テレビでベトナム民衆と一緒に眺めた。月から生中継出来て、なぜベトナムから出来ないのだとぼやいたものである。

ベトナムに赴任する前年の南極観測隊の同行取材ではフィルムを持ち帰り、放送するまでに2ヶ月

を要した。1973年のエベレスト登山隊に同行した時は、ベースキャンプから飛脚に託してカトマンズに送り、定期航空機に載せたので放送までに10日以上を費やしたが、十数年後、昭和基地からも(1978年NHK)、エベレストの頂上からも(1988年NTV)生中継が実現した。



ベトナム戦線中部戦線の米軍基地
煙は戦車砲の砲煙

ベトナムへ行って驚いたことは、アメリカのテレビカメラマンは同時録音カメラを持ちで撮影していることだった。日本では同録カメラは重いので三脚に据えて撮影するのが常識だったが、彼らは特殊なシオルダーポッドにオリコン400カメラを搭載して戦場を

駆けめぐっていた。

帰国してからこのシオルダーポッドを取り寄せて、日常の取材に使用したところ、音がついていいると迫力があると編集長は喜び、以後同時録音取材が増えるのだが、重いものを担がせやがってと先輩カメラマンには評判が悪かった。

ベトナム戦争は1975年4月に終結したが、北ベトナム軍の戦車がサイゴンの大統領官邸に突入する有名なシーンを撮影した小田カメラマンによると、あれは実際に突入した翌日に、北ベトナムの記録映画用に再現したものだと言

う。30年後の湾岸戦争では、記者やカメラマンが砂漠地帯をイラクに進攻しながら生中継でリポートしていたし、米軍はカメラを搭載したミサイルが目標物に突入するまでの映像を公開した。戦争が生中継で伝えられる時代になったのが、私にはテレビゲームを見ているようで、なぜか現実感のないものに感じられた。

■ENGの導入

1975年の沖縄海洋博に、日本テレビが3/4インチのVTR

を持ち込んだのが、日本のテレビ局に於ける本格的なENG取材の始まりと言える。当時NTVは沖繩に系列局がなかった為、現像の必要がないENGを使用して現地NTTから割中と言う方法で伝送した。

しかしVTRはオープンリール式でかなり大型だったため機動性に乏しく、日常のニュース取材には使用されなかった。

TBS報道局がENGを導入したのは1977年である。それ以前に3/4インチのカセットテープが開発されて装填が簡単になったが、日本のテレビ局はフィルムに比較して画質が劣るとしてな



ケニアで(1979年)
カメラはSONYのBVP300

なか採用しなかった。反してアメリカのテレビ局はその機動性に注目し、積極的にニュース取材に採用した。アメリカでは撮影した素材を現場から伝送し最新の映像を放送している。これぞテレビニュースの究極の姿である」と伝えられ、画質にこだわっていた日本のテレビ局も導入に踏み切った。機材は全て日本製でいわば逆輸入だった。



ヒマラヤの秘境ムスタンの世界初取材

TBSでは1975年から導入の検討を始めたのだが、翌年にロッキード事件が発生して、長期取材に力を注いだために導入が半年遅れた。カメラ本体が12kg、VTRはバッテリーの予備、マイク機材などを含めると約20kgになり背

負子につけて使用した。
当初はフィルムの大替物として撮影後持ち帰っていたのだが、1978 年茨城県日立市で発生した女子中学生誘拐殺人事件に小型中継車と共に出勤し、撮影した素材を伝送しキャスターの生リポートと混ぜて放送したのだが、フィルムで出勤した他社に半日以上の差を付け、遠隔地ほど威力を発揮することを実感した。



衛星を使ってどこからでもニュースが送れる
SNG車(台北)

素材を現場から電波で送れる。これこそがフィルムにない機能であり、テレビニュースにとってまさに革命だった。これまで映画の機能を借用していたのが、ENGの採用によって取材から送出まで

全て電子の世界で統一され、やつとテレビ本来の姿が完成したと言える。

以後、小型中継車が多用されるようになり、通信衛星が打ち上げられ、可搬型送信装置が開発されて全世界からの伝送が可能になり、時間的距離がなくなった。

フライアウェイと呼ばれた海外からの衛星送信機材は、当初は一式で一〇〇kg以上の重量があり、専門の技術者が同行しなければできなかつたが、現在ではブリーフケース大になり、少ないスタッフで簡単に伝送できるようになった。僅かな年数の間に大きな進歩を遂げ、フィルムで育った人間にとつてはまさに隔世の感がある。

1985 年 8 月の御巢鷹山の日航機墜落事件で、フジテレビが圧倒的なスクープをしたのも伝送手段の発達がなければできなかった。奇跡的に生存していた少女が自衛隊員に抱えられてヘリに収容される姿は、各社とも撮影していたのだが、伝送手段がなかった為に昼のニュースには間にあわなかった。フジテレビは簡易装置からヘリに伝送し、ヘリから東京の基地に中継して昼ニュースで衝撃的な

映像を放送したのだった。速報で完敗した私は、手動で太平洋上の衛星の電波を捕捉した初めての日米宇宙中継を何故か思い出した。



社屋の屋上をめがけてフィルムを投下した

45 年前、伊豆諸島で撮影したフィルムを昼ニュースに間に合わせるべく赤坂上空のセスナから本社の屋上めがけて投下したことなど、今の若い人には想像出来ないだろう。振り返ると小さく開いたパラシュートは風にのって虎ノ門方向へ流れて行った。それでも昼ニュースに間にあったのは、「これを拾った方は直ちに TBS 報道局に届けてください」と書かれた投下袋を通行人が届けてくれたからである。

資料提供 筆者ほか



ヒマラヤ ブリクティサイル峰 初登頂
ヒマラヤ山頂に3/4インチを担ぎ上げたのは
当時としては初めて

京へ素材を送るのに、NTT 端局にテレビ専用回線がなかった為に一般電話の 500 回線以上をまとめて代用した。テレビ映像を送るのはそれだけ大変なのだと話しても、携帯電話で動画が送れる今日ではなかなか理解されない。アナログからデジタルになり、機材が発達すればするほど「自分の目と瞬時の判断力」がより必要となる。これからの若いカメラマンや記者諸君は大変だろうなあと想像しつつ頑張つて貰いたいと願う。